

一 次の文章は、東京から地方都市である美流間市に引っ越してきた小学二年生の仁美（ひとみ）が、心太（しんた）（テンちゃん）、千穂（ちほ）（チーホ）、無量（むりょう）などの子供たちと仲良くなつていく物語の一節です。この文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「あー、やだなあ。もうじき学校始まつちゃうよ。そしたら、朝ごはん食べた後、給食まで、なーんにも食べらんないら。ぼく、それだけが、やでやで泣きたくなつちゃうの」

「えー？ 千穂、給食嫌い。それよか、眠くなつても、学校では寝たら怒られちゃうから、それで泣きたくなつちゃうの」
自分が当然と思つていたことのせいで泣きたくなるという二人の会話が、仁美には信じられませんでした。なんか、ちよつとわがままな気がする。そう感じながらも、彼らに対して① あこがれにも似た気持ちがわいて来るのでした。母が聞いたら、しつめの悪い子たちね、とあきれられるかもしれません。でも、本当は自分も、したいことのために、彼らのように泣きたくなってみたい。だって、その、したいことというの、勉強やお手伝いなどではないのです。食べたい。眠りたい。まるで、赤ちゃんの泣く原因と同じようなことなのです。もう赤ちゃんじゃないんだから、という大人の言葉など、ものともしていません。好きなように食べている。隙があれば眠っている。

「どうして、二人とも、そんなに、食べたり眠ったりが好きなの？」

仁美の問いに、無量と千穂は顔を見合わせました。そして、② どちらからともなく笑い出したのです。

「別に好きな訳じゃないよね？ ムリヨ」
「うん。ぼく、食べたいから食べてるだけだもん。好きかどうかなんて、わからんだあ。そんなもんだで食べてるだけ」

土地の言葉なのか、仁美の知らない言い回しで答えて、無量は、バナナの皮をむき始めます。この子ったら、猿よりもバナナが似合ってる。

「そんなの変だよ」

「変じゃないよ！」

千穂は、バナナのおすそ分けをひと口分受け取りながら、仁美の言葉を、きつぱりと否定します。

「じゃ、仁美ちゃんは、好きだから食べるの？ 好きだから眠るの？」

「う……ん」

「嘘だあ。食べたいから、好きってわかるだけじゃない？」

仁美は、何と返して良いのかわかりません。好きとを感じるから食べたい場合もあるし、おなかがすいたから食べずにはいられないことも

あるのです。どちらを切り離す訳にも行きません。どちらが最初に来るのかなど、考えたこともなかったのです。

「チーホもムリヨも、あんまり新しい奴、いじめんなよ！」

声のする方を見ると、いつのまにか心太が橋のたもとに立っていました。千穂が、はしゃいで手を振ると、彼は、飛びはねるようにしてこちらに降りて来ました。

「テンちゃん、こないだ仁美ちゃんと、お山に行つたでしょ。こんど、千穂も行く。ひとりじゃ駄目って、お母さんに言われたけど、テンちゃんと一緒に大丈夫だもん」

「やだ。おまえは、うちで寝てればいいだら」

「ずるーい、仁美ちゃんばかり」

千穂は、仁美を、にらみ付けました。困つたなあ、と思いました。こんなことで意地悪をされては、たまつたものではありません。それにしても、と仁美は思うのです。千穂ちゃんは、テンちゃんが好きなんだなあ。チーホなんて呼ばれて、いい気になっている。なんだか、馬鹿みたい。

「フトミとは、歩いてたら、ばったり会つたんだ。迷子になつてたから、家まで連れてつてやつただよ」

仁美は、顔が赤くなるのを感じました。フトミと呼ばれて、自分も少しだけいい気になっています。馬鹿みたい。

心太は、ポケットから玉子を二つ取り出して、無量に渡しました。無量は、喜んで、そのひとつの殻をむき始めましたが、A はずねました。

「テンちゃん、塩は？」

「あ、忘れた」

「えー、ぼく、塩なしのゆで玉子は許せないだよ」

心太は、肩をすくめました。やがてB 手をたたきました。そして、突然、仁美の頬を、ぎりぎりつつねつたのです。

「フトミは、ほつぺたに、いっぱい肉付してるから、つねりたくなるじゃん」

仁美は、何をされているのかわからず、呆然として（注1）いました。

「ムリヨ、フトミの涙、玉子に付けて食べればいいだら。涙は、しょっぱいから、ちようどいいだら」

仁美は、じつと頬の痛みに耐えていました。いじめられるとはこういうことか、と思うと、口惜しさのあまり、かえって泣くに泣けないのです。心太の出現を、少しでも心強く感じてしまった自分のうかつさを悔いていました。

「テンちゃん、もういいよお。ぼくさあ、ソース煎餅に付いてるソース付けて食べるからさあ、もう止めなよお」

無量が、C 心太に懇願（注2）しました。と、同時に、仁美の頬は解放され、彼女は顔を両手で覆つてうずくまりました。

さすがにかわいそうと思つたのか、千穂が駆け寄つて背中をさすります。

「テンちゃん、ひどいよ。やるんなら千穂にやればいいじゃん。仁美ちゃんは、まだ引越して来たばかりなんだよ」

③ その言葉に、なぜか、ずるいものを感じて、仁美は顔を上げました。そして、きつぱりと宣言したのです。

「私は、泣かないよ。眠つちゃ駄目って言われて泣きたくなる子とか、食べちゃ駄目って言われて泣きたくなる子とかとは違うよ」

千穂は目を丸くし、無量は玉子を喉に詰まらせてあわてて水筒に口を付けました。心太は、D、しばらくの間、仁美をみつめていましたが、やがて、無量の袋から、手探りで源氏パイを取り出しセロファンをはがしました。そして、半分に割り、仁美に差し出しました。彼女は、無言で、それを口に入れました。バター風味とぎらめの砂糖の甘さが舌の上で溶けて行きます。

「甘いらー」

心太は、自分も口に運びながらたずねます。仁美はうなずき、すると、必死にこらえていた涙が、後から後から流れ落ちました。濡れて、ほとびた目許（めもと）を見ても、心太は、もう玉子に付けるとは言いませんでした。四人は、無言のまま、それぞれの手にした食べ物を咀嚼（そじやく）し続けました。そして、無量のつぶやいた、黄身一個しかなかった、という言葉をしおに立ち上がり、家路（いえじ）についたのです。

新学期が始まると、④ 仁美は、転校生としての役割に甘んじなくてはなりません。休み時間のたびに、他の教室から、何人もの子供たちが、彼女の顔を見にやってきました。そして、口々にはやし立てながら、彼女のたたずまいに、東京者のしるしを見出そうとするのです。ここ美流間市は、東京から、新幹線を在来線に乗り継いで、たかだか三時間足らずでしたが、それでも、生まれ育つた土地を離れたことのない子供たちにとって、彼女は、よその国からやって来たお嬢さん（お嬢さん）のように思われたのです。ノートが違う、お道具が違う、上履（じゆば）きが違う。そろえる時間がなく、新学期までに間に合わなかっただけなのですが、自分たちとの違いを見つけ出した気になり興奮しているのです。

緊張した面持ちで席に着いたままの仁美に、同じクラスの女の子たちが、矢継ぎ早の質問を浴びせます。新幹線の窓が開かないのは本当か。東京の人は、皆、ベッドに寝るのか。夏休みの宿題は、「なつやすみの友」なのか。田んぼや畑を見たことがあったか。

⑤ 驚いている仁美の代わりに、いちいち千穂が答えていました。両親の話によると、彼女は、岐阜の工場の社宅で生まれてから地方を転々として美流間に越して来たので、東京は知らないはず。それなのに、社宅の子は都会の子と言わんばかりに得意になっているのです。仁美は、彼女を見ると、いつもそうなってしまうのですが、この時も、少し意地悪な気持ちが頭をもたげて来ました。

「私の住んでいたのは、畑のまん中だったよ。チーホが言ってるみたいなことじゃなかったよ」

ざわめきの中で、千穂は、黙り込んでしまいました。でも、事実です。仁美が住んでいた杉並の外れには、まだのどかな田園風景が広がっていました。自分が、この子供たちとは、まったく違う世界にいたと思われたくはありませんでした。大きなデパートや遊園地の記憶は、なしにしようと思えました。彼女は、子供なりに、この土地でうまくやって行こうと決意していたのです。

「なあんだ、あたしらと一緒にじゃん」

仁美の話を聞いていた女の子たちが笑いました。千穂も、合わせて、ぎこちなく笑っています。あわれな気もしました。でも、そう感じると、彼女に対する好ましい気持ちに戻って来るのです。お隣りさんが嫌いな人であつては、毎日が大変です。

突然、教室の後ろの方が騒がしくなりました。心太が入って来たのです。他の男子たちが、じゃれ付きながらも、彼のために道を開けます。仁美の机の回りにたむろしていた女の子たちが、一斉に、はしゃぎ出しました。

「テンちゃん、違う組なのに、入って来たたら、駄目じゃん」

「朝、廊下走つて、先生に叱られてたら」

「えー？ またあ？ テンちゃん、いつつもそうじゃん」

「でもさあ、町田先生、いつつもテンちゃん怒つた後、笑つちやつてるよ」

「 সেইじゃあさあ、町田先生、ほんとはテンちゃんのこと好きなんだら」

「好かれてらー」

「好かれてらー」

次々とからかいの言葉を投げ付けられながらも、心太は、一向に動じる様子はありません。千穂が、すいと、一步、前に出てたずねました。

「テンちゃん、なんか御用？」

自分が窓口か何かのような態度です。千穂は心太が好きなのだなあ、と仁美は改めて思いました。そして、千穂だけでなく他の子たちも同じなのだなあ、と。きつと、自分もそうなる。けれども、皆とは、おそろく違つふうに。自尊心のようなものが、彼女に、こうつぶやかせます。

心太は、千穂の問いかけを無視して仁美の側に寄り、彼女の髪をいきなり引つ張つて言いました。

「こいつ、太いから、これからフトミな」

女の子たちは、同時に吹き出しました。仁美は、無然として（注4）心太を見つめました。彼も笑うばかりです。⑥この瞬間、彼女は、新しい者であることの負担から、唐突に解放されたのでした。

（山田詠美『学問』より）

（注1） 呆然として…あつけにとられて

（注2） 懇願…熱心に頼むこと

（注3） 咀嚼…食べ物をかみくだくこと

（注4） 無然として…意外な出来事に驚きあきれて

問一 —— 線①「あこがれにも似た気持ち」とはどのような気持ちですか。適切なものを次の中から一つ選び、ア～エの記号で答えなさい。

ア 自分なら口に出しただけで母親に知られるようなことを、自由に口に出せる千穂や無量をうらやましく思う気持ち。

イ 自分がやりたくてもがまんしているようなことを、素直に「やりたい」と言える千穂や無量をうらやましく思う気持ち。

ウ 食べたいだけ食べたり、寝たいだけ寝たりしても何も言われない千穂や無量をうらやましく思う気持ち。

エ 勉強やお手伝いをせず、毎日外で遊んでいても注意されない千穂や無量をうらやましく思う気持ち。

問二 —— 線②「どちらからともなく笑い出したのです」とありますが、二人はなぜ「笑い出した」のですか。その理由の説明として適切なものを次の中から一つ選び、ア～エの記号で答えなさい。

ア 自分の好きなように食べたり眠ったりできない仁美の生活を、不自由でかわいそうだと思ったから。

イ 仁美の質問が、まだこの土地に来たばかりで自分たちの生活になじんでいない証拠のように思われたから。

ウ 自分たちが当たり前だと思っていることを、仁美から不思議そうに聞かれたのが意外だったから。

エ 好きだから食べる、好きだから眠るといふ仁美の考え方があまりにもわがままで、おかしくなったから。

残念ながら日本では、この三つのことがきちんとされているとは言えません。これまで、雇用は「個人と企業」の問題と考える向きが多かったのです。個人と企業が対等の関係にあるならそれでもいいでしょう。でも現実はどうではない。ふだんもそうですが、とくに景気が悪くなると、企業側は一段と **A** 立場を振りかざし、一方の働きたい側は **B** 立場になります。これではどうしても個人の側は不利になり、雇用も解雇も企業主しだいとなりやすいのです。それでは困る。どうするか。

第一に、働く人をかんとんに解雇できないような安定した雇用システムを構築することです。第二に、経済中級国家でいいから、働く場だけは維持できるほどの経済システムを構築することです。

これらによって、人々は安心して仕事にうちこめるようになるし、金銭的には貧しくても、家族ともども安らかな生活が送れるようになるはず。その結果はどうでしょう。生きるエネルギーが人々のあいだで高まるだけではない、結局はその国も安定した安全で豊かな社会を実現できるのです。

これは考えを逆転させるとよくわかります。失業者が街にあふれた。貧困と疾病で生きる力を失った民は自暴自棄に陥り、あちこちで暴動が起こった。国は疲弊し、その存在すら危うくなった。つまり、雇用は国と民の双方にかかわる安全保障の重要問題なのです。だから、私たちは雇用についての発想を大きく変えなければならないのです。

だが、日本は逆の方向を歩いています。それをもっとも明確にあらわしているのが「非正規雇用労働者」の問題です。これを材料に歪んだ雇用の実態をみてみます。

総務省の「労働力調査」によると、一九九〇年代以降、この国の正規雇用労働者が減り「派遣」など非正規雇用労働者がふえています。一九九八年から二〇〇八年までの一年間の数字をみると、非正規が五八七万人ふえ、正規は三九五万人減りました。③このまま進むと、

そう遠くない時期に正規と非正規の数が逆転する危険すらあります。

もう一つ、データをあげましょう。二〇〇九年二月末の厚生労働省の発表によれば、二〇〇八年一〇月から〇九年三月までに職を失う非正規雇用労働者の数は全国で一五万七八〇六人に達するというのです。二〇〇八年末の調査結果の一・五倍を軽く超え、〇九年一月末の調査にくらべて約三万三〇〇〇人もふえました。

内訳をみると、いちばん多いのが「派遣労働者」で約一〇万七〇〇〇人、つぎに期間労働者などの「契約労働者」が約二万九〇〇〇人、「請負」が約一万三〇〇〇人、「パート」などが約八六〇〇人、契約が切れる前に中途で解除されたり解雇されたりした人は約六万五〇〇〇人、期間満了の雇止めは約七万九〇〇〇人。失職して社員寮などを追われ住まいを失った人は、確認できただけですでに三〇八五人に達したということです。なかでも注目したいのは、派遣社員のうちで比較的雇用が安定しているといわれる「常用型派遣」労働者ですら、そ

の八三%が失職していたということです。(毎日新聞二〇〇九年二月二十七日ほか)。

これらの数字をみてどう思いますか。

働く人に正規と非正規といった差別と格差がある、しかも非正規労働者がどんどんふえている、それを不思議に思わない、そんな現実をどう思いますか。いついつまで働きます、では働いてくださいという契約書を交わしながら、不況です、ハイ、さようならと一方的にクビを切る、しかも住まいまでとりあげる、この事実をどう思いますか。

正規と非正規と。明らかに差別です。それに「非」正規だなんて、あの後期高齢者という以上に不快な言葉ではありませんか。この国の労働者はすべて、本来、労働基準法や労働契約法などの法律で、身分その他が保護されているはず。雇う側が勝手に解雇することなどできません。働いた時間において一定の賃金が保障されています。なにかのついで、一方的に仕事を休まされた場合は休業手当がもらえます。雇用保険、労災保険の制度もきちんと法律で決められています。労働者の健全な生活を保障するためのとうぜんな配慮であり、世界の先進諸国ではどこでもあたりまえのことです。

ところが、これでは労働者寄りすぎるとか、カネがかかりすぎるとか、仕事のないとき人減らしできないといった苦情が雇用者側から出てきました。そこで登場したのが、正規でない、つまり法的な労働者保護の枠をとりはらった雇用システムを、という考えです。スローガンは「雇用の自由化」でした。自由な時間に、従来の労働の枠を超えて、自由な働きを！ ④こう言われるとなにかスマートに聞こえますが、多くの場合、その「自由」は働く側より働かせる側に有利なものでした。④その実態はまもなく明らかにになります。こうして多くの労働者の権利が踏みじられ、いつクビになっても泣き **b** させられることになりました。

(中馬清福『日本の基本問題を考えてみよう』より)

(注1) 顕著に…きわだつて目につく

(注2) 堅牢な…非常にしつかりした

問一 —— 線①「なんとか折りあいをつけて働きはじめます」とありますが、具体的にはどういうことですか。「提供される仕事」から始まる三十文字以内の文で分かりやすく説明しなさい。

問二 —— 線②「亡国への道にいたる」とありますが、筆者は文中で——線②の内容を具体的に説明しています。その部分(連続するいくつかの文章)を、——線②より後の文中から探し、最初と最後の五字を書き抜いて答えなさい。

問三 A ・ B にあてはまる語の組み合わせとして適切なものを次の中から一つ選び、ア、イ、エの記号で答えなさい。

A

B

- ア 買っていただく 買ってやる
- イ 売ってやる 売っていただく
- ウ 働いていただく 働いてやる
- エ 雇ってやる 雇っていただく

問四 — 線③「このまま進むと、そう遠くない時期に正規と非正規の数が逆転する危険すらあります」とありますが、筆者が危険と感じているのはどのようなことに対してですか。適切なものを次の中から一つ選び、ア、イ、エの記号で答えなさい。

- ア 不況になると簡単にクビを切られ職を失う可能性のある人の数が増えること。
- イ 非正規という不愉快な言葉で呼ばれる人々が多くなり労働意欲が低下すること。
- ウ 一つの職場や職業で長期間働く人の数が減っていくため、技術力が低下してしまうこと。
- エ 正規と非正規の数が逆転することに対し人々がほとんど不思議に感じていないこと。

問五 筆者はどのような社会を理想と考えていますか。それが具体的に示されている段落をさがし、最初の五字を書き抜いて答えなさい。

問六 — 線④「その実態はまもなく明らかにあります」とありますが、「その実態」とはどのようなものですか。「非正規労働者」という語（「」は不要）を必ず用いて、具体的に五十文字以内で答えなさい。

問七 a ・ b にあてはまる二〜三字（漢字でもひらがなでも良い）を答えなさい。

問三 次のそれぞれの俳句の季節を、春、夏、秋、冬のいずれかで答えなさい。

- 1 わがいのち菊にむかいてしずかなる
- 2 海に出てこがらし帰る所なし
- 3 柿食えば鐘がなるなり法隆寺
- 4 炎天に樹々おしのぼるごとくなり
- 5 畑うつや土よろこんでくだけけり

問四 次のそれぞれの矢印の部分は、何画目にあたりますか。漢数字で答えなさい。

- 1 式
- 2 希
- 3 歩
- 4 登
- 5 書

五

次のそれぞれの――線部のカタカナを漢字に改めなさい。

- 1 テツボウ運動がじょうずだ。
- 2 手術でユケツが必要だ。
- 3 県大会にホケツ選手として参加する。
- 4 学校の近くにバスのテイリュウジヨがある。
- 5 寒い地方に生えるシンヨウジユ。
- 6 念のためキユウキユウシヤを呼んだ。
- 7 まだミジユクな科学者。
- 8 僕らの学校はソウリツ百周年になる。
- 9 あの女優はエンギがうまい。
- 10 ちよつと免許証をハイケンします。